


成果報告書

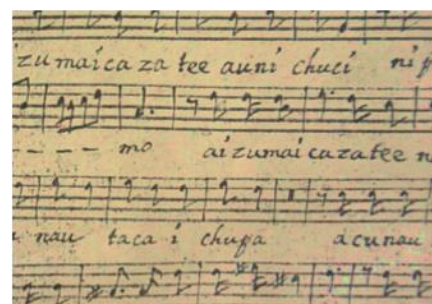
記入日 2016年 3月 1日

氏名	金子 亜美	渡航先国名： ボリビア多民族国	所属機関： ガブリエル・レネ・モレノ自治大学附属 歴史博物館 人類学歴史学研究所
研究テーマ：	儀礼的活動とテキストの関係をめぐる人類学的研究 - ボリビア・チキトス地方のキリスト教儀礼における説教と教会音楽を事例として -		
研究期間：	2014年 3月 ~ 2016年 2月		
<p>報告者は、ボリビア多民族国サンタ・クルス県にあるガブリエル・レネ・モレノ自治大学附属歴史博物館人類学歴史学研究所に所属し、同県チキトス地方におけるいくつかの村落において、2年間にわたる住み込みを行った。その報告を始めるにあたり、まずこの留学を可能にくださった松下幸之助記念財団の皆様へ感謝を述べたい。順調なことばかりでは必ずしもない2年間の留学を終えることができたのは、あたたかい激励の言葉やビザ取得に関するサポートを、繰り返しいただいたからに他ならない。心より感謝を申し上げたい。</p> <p>以下、成果の概要を述べたのちに、1. 留学の目的、2. 研究の方法、3. 留学中の研究の結果をまとめていく。その後、4. 留学中に発表された研究業績を記し、留学中のトピックスおよび今後の展望報告を閉じる。</p>			
<h3>成果の概要</h3> <p>「現在の儀礼的活動と、儀礼に関するテキストの関係を考察する」という留学の目的を達成するために、チキトス地方に住み込み、カトリック儀礼においてテキストがどのように用いられるか、主に参与観察で調査した。また、チキトスのミッションの歴史に関する文献研究・史料収集を行うことで、儀礼とテキストについての問いに取り組む見通しを得ることができた。</p>			
<h3>1. 留学の目的</h3> <p>本留学の目的は、現在の儀礼的活動と、過去から継承されてきた儀礼に関するテキストの関係を考察することであった。カトリックの主要な典礼であるミサを例にとっても、それは歴史的裏付けをもつ様々なテキストによって規定されている。例えばカテキズムやローマ・ミサ典礼書がそれにあたり、そこではカトリックの規範や典礼での振る舞い方が、明示的に記されている。17-18世紀にかけてイエズス会ミッションが存在したチキトス地方でも、現在までカトリックが深く信仰実践されているが、ここで報告者の目を引いたのは、明示的に記された意味以外の仕方で、テキストが儀礼的活動と結びつくあり方であった。</p> <p>そのあり方はまず、説教 <i>sermón</i> と呼ばれる儀礼的な発話と、それを記したテキストの関係のうちに見出された。説教は、カトリック祝祭日に先住民典礼組織カビルドの成員によって行われる特別な発話である。それは、ミッション時代から代々複写されてきたとされるテキストを見ながら、先住民言語チキタノ語で発話される。日常的にもっとも用いられるのがスペイン語である現在、チキタノ語という言葉は、60歳代以上の高齢者の一部が</p>			



かつて話し理解したものとなっている。それゆえ、より若い世代にとってチキタノ語はもっぱら儀礼的なものであり、説教の意味内容もほとんど理解されない。ここからは、説教という儀礼的活動が、そのテキストが明示的に記す意味の力によって規定されているのではないことがわかる。それでは、説教がテキストを参照しながら行われなければならないのはなぜか？ 儀礼的活動が明示的な意味以外のものを通してテキストと結びつくとき、前者の一貫性は揺らぐのではないか？ 説教は、報告者にこうした問いを喚起した。

同様の問いは、音楽についても立てられた。当地の先住民のうち、カトリックの典礼音楽を司るマエストロ・デ・カピージャと呼ばれる人々は、ミッション時代から伝わる五線譜の写本を継承してきた。しかし彼らは往々にして五線譜の読み方を知らないため、それらテキストを規範として演奏をするということがない。そして、それにもかかわらず、自分たちの音楽のすべても同じように一刻も早くテキスト化されることを望んでいた。音楽とテ



キタノのこうした関係は、後者の明示的な記述内容が典拠とされているわけではないという点で、説教と似ている。いずれのテキストにしても、儀礼的活動の一環性や普遍性を保証するものとして働かないのだ。

以上のような問題に、チキタノの説教と音楽という事例を通して取り組むことが、この留学の目的であった。

2. 研究の方法

そこで報告者は、チキタノ地方のなかでも典礼組織カビルドが精力的に活動しているサン・イグナシオ市に住み始め、儀礼的活動とテキストの使用についての参与観察と、必要に応じて聞き取り調査、および各種資料収集を行い始めた。サン・イグナシオ市は、県内でも屈指の規模を誇るベラスコ郡の中心地であり、市内の人口は約5万人、国勢調査によれば、そのうち73%が「先住民チキタノ」、18%は「先住民以外」、それ以外がその他の先住民に、それぞれ自己同定する。報告者は留学期間中、7軒の家に滞在した。先住民以外を自称する地元エリートの家庭2軒、先住民チキタノ家庭3軒、1軒の外国人家庭、そして1軒の独立したアパートである。

主要な研究対象である先住民典礼組織カビルドには、スペイン語とチキタノ語を学びにきた奇妙なアジア系学生として受け入れられた。カビルドとは、ミッション内の行政的・宗教的秩序の管理を任された先住民組織としてイエズス会時代に発足したが、現在は宗教的な機能しかないと考えられている。その成員は主に60歳以上の男女、および数名の20-30代男性とその妻であり、各々がカシケ(首長)・マエストロ・デ・カ



ピージャ(典礼音楽を司る)などの役職を担っている。その主な役割は日曜のミサや祝祭に参列することであり、その人数は教会暦上のイベントの規模に応じて、10名以下から50名前後まで流動的である。

カビルドと出会った時、報告者のスペイン語能力は日常会話程度以下、チキタノ語能力はほぼゼロであった一方で、学部時代に音楽学を修めた経験があることを伝えた。すると、彼らがチキタノ語を教えてくれる代わりに、カビルドの音楽を採譜するよう、報告者に提案した。このようにして、チキタノ語学習・カビルド音楽の採譜が始まり、報告者はそのなかでテキストの用いられ方を見ていくことになった。

チキタノ語学習は、カビルドの成員の家を訪ねては説教の意味を質問したり、小学校のチキタノ語授業の参与観察をしたりする中で行っていたが、地元エリートの家に住んでいる中では遅々として進まなかった。そこでいよいよ先住民チキタノ一家の一部屋を間借りすることにしたが、家賃が半額となった代わりに水洗トイレと閉ざされたシャワールームがなくなった。さらにチキタノ語についても、報告者自身が質問の仕方をまだ心得ておらず、また70歳代の大家夫婦も「もう忘れてしまった」部分が多かったため、思っていたより苦戦した。

その間も断続的に、周辺諸村落の守護聖者祭に泊りがけで出かけ、説教や音楽の参与観察を行った。チキタノの人々の人脈も少しずつ広がり、特に注意をひく説教と音楽の事例に出会ったサンタ・アナという集落には半年間住んだ。新しい音楽を聴くたびに五線譜に書き起こし、最終的に80曲以上の楽譜を作成しカビルドに献呈した。また、以前マエストロ・デ・カピージャが自宅に保管していたミッション時代の音楽写本やイエズス会時代の史料を渉猟するために、コンセプション市に間借りしたり、チュキサカ県スクレ市まで出かけたりすることもあった。



3. 研究の結果

まず、説教とテキストに関する研究について述べたい。60歳代以上の高齢者を除いて、チキタノ語がほとんど日常的に用いられない現状についてはすでに述べた。そのため、チキタノ語でなされる説教において、そのなかで明示的に語られている内容(カトリックや共同体生活の規範)自体は必ずしも問題になっていない。それでも説教を行う人が、ノートなどのテキストを参照しなければならないのはなぜだろうか？

そもそもチキタノ語とは、ミッション時代宣教師らが、当地の圧倒的な言語的多様性に対処するために「共通語」として制定した、先住民言語の一つであった。そしてこの言語には、男女によって語彙や言い回しが異なるという特徴があった。そこで宣教師らは、神や天使といった超自然的存在を特別に区別する男性話法を評価し、祈りや聖歌などを男性話法に翻訳し、文書に書きつけることを決めたのである。そのような経緯で作られた男性話法による数々のテキストは、それを読み上げる者にも司祭の権威を背景とする特権を付与してきた。だからこそ説教テキストは、その明示的な内容にかかわらず、説教の遂行に際して必要とされるのである。



そしてこの男性話法による説教テキストは、チキタノ語話者が減少しつつある現在、ある奇妙な状況を生じさせている。報告者は留学期間中ただ一人だけ、説教を行う女性と出会った。彼女はサンタ・アナという集落の守護聖者祭で、通常男性によって行われる説教を、人手不足という理由ですでに3年間つとめてきた。注目すべきことに、彼女の説教は実のところ、女性話法ではなく男性話法でなされている。

それはなぜなのだろうか？ 女性が説教を行う場合それを女性話法に直すことが理想とされているが、日常的にチキタノ語を話さない彼女は、古来伝わる男性話法のテキストを文字通り読み上げることを選択した。そしてチキタノ語話者の減少した現在のサンタ・アナにおいて、彼女の説教が男性話法によるものであることに気づく者すら多くはない。気づく人がいても、「仕方ない、話せる人がいないのだから」と言う。しかもこれは例外的な事例というわけでもない。学校の授業で歌われるチキタノ語の歌なども、すべて男性話法でのみ教えられるようになっている。話者の減少に伴い、チキタノ語といえども、テキストと結びついた男性話法になりつつあるのだ。

説教テキストの明示的な意味とは別の部分—すなわち、男女による語法の差—に遠く響いているミッションにおける言語政策の歴史が、チキタノ語話者が減少しつつある現在、説教という儀礼的活動を一定不変のものとするかわりに、むしろその変容を促している。そして音楽の場合にも、同様の事態が生じている。先に述べたように、先住民典礼音楽をつかさどるマエストロ・デ・カピージャたちは、音楽テキストが明示的に記す内容を、演奏の規範として用いることをしない。それにもかかわらず彼らは、自分たちの音楽が完全にテキスト化されることを望んでいた。その際、彼らが「五線譜」という形態でのテキスト化を望んだのは偶然ではない。それはチキタノ語と同様、ミッションの歴史という権威を背景に持つ、特別なテキストの形態であると考えられているからだ。

五線譜という歴史的根拠に支えられた形態自体が、音楽という儀礼的活動そのものにもやはり影響を与えるのだろうか？ 報告者はカビルドの音楽の一部を、地元の少年少女オーケストラとカビルドのアンサンブルのために編曲するよう依頼されたことが幾度もある。その際五線譜がもつ限界が、実際の音楽演奏において露呈した。たとえば、五線譜が12種類の音程しか区別しないのに対し、カビルドの楽器はそれをしばしば逸脱する。また、五線譜が比較的規則的で厳密なリフレインや速度を指定しその遵守を前提とするのに対し、カビルドの音楽では自由なリフレインや装飾音・速度の揺れを即興的に繰り出すことが評価される。カビルドの音楽の自由さを捨象して作成された五線譜に従う少年少女オーケストラと、五線譜を用いず普段通り演奏するカビルドのアンサンブルは、どのコンサートでも最後まで重なり合うことがなく、いつも新しい不協和音を生み出すのであった。



以上のようにして、報告者がチキタス地方で出会った人々は、歴史的裏付けのあるテキストを希求するが、それは儀礼に普遍性や一貫性を付与するためには必ずしもなかった。ある固有の儀礼的活動に、ミッションの言語政策の歴史やイエズス会の音楽伝統がテキストを通して遠く響いてくるのであり、その仕方は一様ではない。そのことを、現在のチキタスで繰り上げられるさまざまな儀礼的活動は、報告者に教えてくれた。

4. 留学中に発表された研究業績

口頭発表

- 2014.04.08 “Varios aspectos de tradición: desde el punto de vista de antropología.” Curso antropólogo de facultad de educación en la Universidad Autónoma Gabriel René Moreno. [「伝統のいろいろな側面：人類学の視点から」、ガブリエル・レネ・モレノ自治大学教育学部人類学コースでの特別講義]
- 2014.09.18 “Antropología de voz y comunicación: significación pragmática de diálogos rituales.” Curso de antropología filosófica en el Colegio Internado Agropecuario San Miguelito. [「声とコミュニケーションの人類学：儀礼的発話の語用論的意味」、サン・ミゲリート農業学校人間学での特別授業]
- 2015.10.16 “Transformación del significado social de la diferencia sexual en el idioma chiquitano: un estudio antropológico sobre las oraciones católicas en la Chiquitania.” Tierras bajas: segundas jornadas de antropología, historia, arqueología. Museo de Historia de UAGRM, Santa Cruz de la Sierra, Bolivia. [「チキタノ語における性差の社会的意味の変容：チキタニアにおけるカトリックの祈りに関する人類学的研究」、低地：第二回人類学・歴史学・考古学会、ガブリエル・レネ・モレノ自治大学歴史博物館、査読あり]

論文・報告書

- 2015 “Diferencia de habla entre hombre y mujer: transformación del significado metapragmático sobre el uso de la indicialidad del género en la Chiquitania.” Journal of Latin American and Caribbean Anthropology. [「男女の話し方の違い：チキタニアの性別指標の使用法に関するメタ語用論的意味の変容」、査読中]
- 2015 “Música del Cabildo en San Ignacio hoy, y su vinculación con la tradición misional.” (reporte manuscrito). [「サン・イグナシオにおけるカビルド音楽の現在、そしてミッションの伝統とのつながり」、カビルドに提出した報告書]
- 2015 “Música del Cabildo Indígena: San Ignacio de Velasco.” (reporte manuscrito) [「サン・イグナシオにおける先住民カビルドの音楽」、カビルドに提出した音楽採譜の報告書]

留学中の生活・研究でのトピックス

報告者は留学以前より、人と人のコミュニケーションがどのように交わされるのかに関心を寄せてきた。例えば、スペイン語が話せない状態でサン・イグナシオを訪れた時、カビルドの会合で挨拶するよう促された報告者は、戸惑いながら英語で話し、それを地元エリート男性に訳してもらおうということがあった。そこで報告者は確かに、チチャというトウモロコシの発酵飲料を振舞われ、人々と輪になって踊り、ある意味打ち解けはした。だが今



思えば、会合という場にふさわしいスピーチ様式というものは存在したし、スペイン語以外の意味を用いることの社会的な意味もあったとわかる。こうした、異なるコミュニケーションの規範が出会い、時に対立し妥協し合い、そして混交するプロセスに関心があるからこそ、説教や音楽というコミュニケーションの世代差や男女差を研究対象としてきた。

自己が「コミュニケーション様式の違い」に気づくには、ある特定の様式を採用してみて失敗したり、挫けたりするほかない。そのことが、次のようにチキトス地方の民族論的状况の把握を促したのは事実だが、負担も大きかった。例えば、日本人としての報告者の身なり・顔つき・話し方のすべてが人々の目を引き、誰かとすれ違うたびに chinita(アジア人)と囁かれ、笑われ、口笛を吹かれ、時に罵倒され、口真似をされるのが、とうとう苦痛になった。とはいえ報告者がサルモネラ菌やデング熱で苦しんでいる時に手を尽くしてくれる人々の表情を見るにつけ、それも交歓的コミュニケーションの一つにすぎないと気づいていった。チキトスのコミュニケーションは、往々にして冗談のようにして進むのだ。カビルドの成員の母親が死んだ時、その通夜で「どんなときでも冗談を言わなきゃいけない」と言って大騒ぎしていた男性を、不快気に見る人は一人もいなかった。みな頻繁に互いの家を訪問し合い、ハンモックに腰掛けてはいつまでも冗談を言い合うのだ。

もう一点、報告者を戸惑わせたのは、食べ方・飲み方の様式の違いだった。とりわけ祝祭日には肉をたくさん食べる習慣になっているのだが、初めての復活祭で食事をごちそうになった報告者は、食べきれなくて肉を残してしまった。しかしチキトスでは、食べ物を残すのではなく、ビニール袋に入れて持って帰るのが正しい作法であることを後々教わった。また、チチャが苦手な報告者は、少しずつでも時間をかけて飲むようにしていたのだが、本来はなみなみ注がれた大きな器を一気に飲み干して、残り滓を床に捨てるのが正しい飲み方であることを知っていった。そうしたとき報告者は、胃と舌を酷使して失敗を繰り返しながら、明示的に語られることのないルールを少しずつ学ばなければならなかったわけだが、他方でチキトスの人々は、そのすべてを辛抱強く、しかし冗談で場を和ませながら見守ってくれたのであった。そうした人々のあたたかさのなかで、報告者はコミュニケーション様式の違いに気づき続けるという、人類学的調査の醍醐味を味わうことができたのだ。今回の留学をきっかけに始まったチキトスの人々との関係のなかで、この感謝の気持ちを少しずつ伝えていければと思う。

今後の社会貢献

2年間の留学を通して得られた知見をもとに、報告者は儀礼における言葉・音楽・テキストについて今後も考察を続ける。そのなかで、スペイン語のみならず英語・日本語での成果発表を続け、博士論文を完成させる。そのような学術活動を通して、人類学のみならず南米低地先住民社会研究・ミッション学・音楽学といった分野に対して参照点を提供するとどまらず、グローバル化の中の日本社会における異文化間コミュニケーションのあり方について、広く発信していきたいと考えている。また、今回の留学で先住民音楽を採譜・製本して関係諸機関に手渡したことは、口頭の文化をテキスト化してコレクションしたいというチキトスの人々の願いに応える、報告者ならではの社会貢献であったと自負している。アーカイブ化と現地還元というこの取り組みは、筆記と口頭の関係という人文学の伝統的な問題について深く考えるきっかけを報告者にもたらしたのもであり、今後も積極的に従事していきたいと考えている。

